

## 改訂版中学校検定済英語教科書における 言語の取り扱い—題材論の観点から

川 又 正 之

### はじめに

日本の中学校においては、2008（平成20）年に学習指導要領の改訂が告示され、2012（平成24）年度から施行されている。この学習指導要領の改訂に基づいて作成された中学校外国語科（英語）用検定済教科書（以下「検定済英語教科書」と表記）については、川又（2013）で、「英語帝国主義論」の観点からの分析と考察を行っている。

本稿では、4年間の採択期間が終了したため改訂が行われ、2016（平成28）年4月より中学校で使用されている新しい検定済英語教科書6種類<sup>(1)</sup>について、設定された登場人物を中心に、英語以外の言語（ここでは日本語を含むものとする）がどのように取り扱われているかを、題材論の観点から分析を行う。

まず、現行学習指導要領およびその解説書において、言語の取り扱いがどのように規定されているのかを概観する。次に、実際に使用されている教科書から具体例を挙げて分析と考察を試みる。

### 1. 学習指導要領における教材選定の観点

現行学習指導要領（2008（平成20）年告示版）の「教材選定の観点」は以下のようになっている。全文を示す。

「(2) 教材は、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力を総合的に育成するため、実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮したものを取り上げるものとする。その際、英語を使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化や自然科学などに関するものの中から、生徒の発達の段階及び興味・関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げるものとし、次の観点到に配慮する必要がある。

ア 多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと。

- イ 外国や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育てるのに役立つこと。
- ウ 広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと。」

言語の取り扱いについては、同解説書に以下のような記載がある。

「題材を取り上げるに当たっての配慮事項としては、英語を使用している人々だけでなく、他の言語を使用する人々に関しても理解を深めるとともに、日本人に対しても理解を深めることをねらいとするような題材などから適切に選択して取り上げることが必要である。」(p. 51)

英語だけでなく、それ以外の言語についても題材として取り扱えることを示している。同様に、上記の観点の「ア」については、解説書に以下の説明がなされている。

「題材については、英語を使用している人々をはじめ世界の様々な人々の多様なものの見方や考え方、行動の仕方について知ることができるようなものを選択することが大切になる。」(p. 52)

英語使用者に限らずに、世界の様々な人々を題材として選んでよいことがわかる。

「イ」については、以下のような説明がある。

「『言語や文化』とは、英語はもとより日本語を含めた様々な言語や人々の日常生活に密着した衣食住にかかわる生活文化をはじめ、文学・科学技術・学問・芸術等にかかわることなども含む幅広い分野にわたる文化のことである。この場合、生徒の発達の段階にふさわしいものの中から、生徒の興味・関心を踏まえ、特定のものに偏ることなく、言語や文化に対する関心や理解を高めるのに役立つ題材を選択する必要がある。」(p. 53)

英語に限定せずに、日本語やそれ以外の様々な言語を対象としてよいことがわかる。

これまで見てきた通り、学習指導要領および同解説書においては、英語

のみならず、世界の様々な言語を取り上げることが認められ、勧められていると考えられよう。

次節では、実際の検定済教科書の分析を行う。

## 2. 改訂版中学校検定済英語教科書の分析―題材の観点から

改訂版中学校検定済英語教科書について、まず主要登場人物の設定とその出身地域を概観し、そのあと具体的な英語以外の言語そのものについての記述を検討することにする。

### ①主要登場人物の設定とその出身地域

教科書本文の中でどのような登場人物が設定されているか、またその登場人物の出身地域はどこかを教科書ごとにまとめることにする。なお、本稿では個々の教科書の優劣を比較、判定することを目的としていないため、教科書名は明示しない。

(1) 教科書A (マリア・デュポン以外の登場人物全員が3年間を通して登場)

中学生：加藤健 (日本)、田中久美 (日本)、Raj Shukula (ラージ・シュクラ) (インド)、Emma Simmons (エマ・シモンズ) (オーストラリア)、Yang Meiling (楊美玲 ヤン・メイリン) (中国)、Paul Green (ポール・グリーン) (アメリカ)

中学生以外：丘大輔 (日本) 英語教師、Lucy Brown (ルーシー・ブラウン) (イギリス) ALT (Assistant Language Teacher)、Maria Dupont (マリア・デュポン) (フランス) ファッションデザイナー

(2) 教科書B (3年間を通して登場の場合と2年生用、3年生用で登場する場合あり)

< 3年間を通して登場 >

中学生：佐藤大翔 (ひろと) (日本)、吉田未来 (みく) (日本)、Seema Gupta (シーマ・グプタ) (インド)、Ben Wilson (ベン・ウィルソン) (カナダ)

中学生以外：Jessica Alen (ジェシカ・アレン) (アメリカ) ALT

< 2年生用 (以上) に登場 >

中学生：Elena Kessler (エレナ・ケスラー) (ドイツ) ※9月に転入という設定

中学生以外：Mika Grant（ミカ・グラント）日本、Jim Grant（ジム・グラント）（イギリス）※佐藤大翔のおじとおば、Maya Gupta（マヤ・グプタ）（インド）※シーマのおば

< 3年生用に登場 >

中学生：Nancy Wilson（ナンシー・ウィルソン）（アメリカ）

中学生以外：Kevin Smith（ケビン・スミス）（アメリカ）、Sonia Gupta（ソニア・グプタ）（インド）※シーマの祖母

**（3）教科書C**（3年間を通して登場の場合と2年生用、3年生用、2年生用と3年生用、さらに1年生用と3年生用で登場する場合あり）

< 3年間を通して登場 >

中学生：佐山由紀（日本）、林武史（日本）、Mike（マイク）（アメリカ）

中学生以外：Kate Wood（ケイト・ウッド）（カナダ）ALT

< 1年生用に登場 >

中学生：Amit（アミット）（インド）、Judy（ジュディー）（イギリス）、Matt（マット）（イギリス）

< 2年生用に登場 >

中学生：Lisa（リサ）（アメリカ）、Sam（サム）（アメリカ）

< 3年生用に登場 >

中学生：太郎（日本）、Pat（パット）（オーストラリア）

< 2年生用と3年生用に登場 >

中学生：桃子（日本）

< 1年生用と3年生用に登場 >

中学生：大介（日本）

#### **（4）教科書D**

< 3年間を通して登場 >

中学生：伊藤光太（日本）、安藤咲（日本）、Deepa Mitra（ディーパ・ミートラ）（インド）、Alex Green（アレックス・グリーン）（カナダ）、Becky Jones（ベッキー・ジョーンズ）（オーストラリア）

中学生以外：Ellen Baker（アメリカ）ALT、Mike Baker（マイク・ベーカー）（アメリカ）※ Ellen の弟で日本在住、Mary Brown（メアリー・ブラウン）（アメリカ）※ Ellen の友人でボストン在住、伊藤絵美（日本）※ 光太の姉でロンドン在住、安藤春樹（日本）※ 咲の兄、オーストラリアの大学に留学中、Paulo Fernandes（パウロ・フェルナンデス）（ブラジル）

※サッカー部のコーチ

なお、この教科書では、教科書本文とは別に“Daily Scene”という設定で、インターナショナル・スクールに通う滝川エリカ（父がアメリカ人で母が日本人の少女）とユンホ（韓国出身）が3年間にわたり登場する。登場人物はイラストではなく写真が用いられている。

< 3年生用に登場 >

中学生：Ricardo Takahashi（リカルド・タカハシ）（ブラジル）※祖父が日本人の日系3世で日本在住

**(5) 教科書E**（全員が3年間を通して登場）

中学生：谷健太（日本）、小野あやか（日本）、Mei Lee（メイ・リー）（シンガポール）、Bob West（ボブ・ウエスト）（アメリカ）

中学生以外：Cathy King（キャシー・キング）（オーストラリア）ALT

**(6) 教科書F**（全員が3年間を通して登場）

中学生：斉藤拓真（日本）、清水亜矢（日本）、Kang Min-ho（姜敏浩）（韓国）、Christina Rios（クリスティーナ・リオス）（アメリカ）

中学生以外：Ms. Brown（オーストラリア）ALT、Steve Rios（スティーブ・リオス）※クリスティーナの父、Elena Rios（エレナ・リオス）※クリスティーナの母、Nick Rios（ニック・リオス）※クリスティーナの弟

各教科書の登場人物の出身地域をまとめると、以下の「表1」のようになる。○は中学生の主要登場人物、△は中学生以外の主な登場人物を示している。

表1：登場人物の出身地域

	教科書 A	教科書 B	教科書 C	教科書 D	教科書 E	教科書 F
日本	○△	○	○	○△	○	○
インド	○	○△	○	○		
韓国						○
中国	○					
シンガポール					○	

アメリカ	○	○△	○△	△	○	○
カナダ	○	○	△	○		
オーストラリア	○		○	○	△	△
イギリス	△	△	○			
ブラジル				○△		
ドイツ		○				
フランス	△					

登場人物の設定がもっとも多いのが教科書 A で 8 ケ国、教科書 B、C、D がそれぞれ 6 ケ国、教科書 E、F が 4 ケ国となる。いずれの教科書も、日本を含むアジア地域、英語を母語とする地域、それ以外の非英語使用地域、という三つの観点から設定が行われている。

出身地域では、日本を除くアジア地域で設定が多いのがインド (4) (以下、カッコ内は教科書数) で、他は韓国 (1)、中国 (1)、シンガポール (1) となっている。英語を母語とする地域では、全教科書 (6) がアメリカ合衆国を取り上げており、他はオーストラリア (5)、カナダ (4)、イギリス (3) となっている。非英語使用地域としてはブラジル (1)、ドイツ (1)、フランス (1) となっている。

第二次世界大戦直後の“Jack and Betty”の教科書の登場人物がアメリカ一色であったことを考えると、隔世の感がある。教科書の登場人物については、確かに一定の多様化がなされたと言ってよいだろう。ただ、一方で、英語を母語とする地域を重視する姿勢は現在も変わらずに受け継がれている、と指摘することもできる。

## ②英語以外の言語の取り扱い

それでは、英語以外の言語 (日本語を含む) は実際にどのような形で教科書に登場しているのでしょうか。実は文化的な題材に比べると、言語そのものが題材化されている例はきわめて少ない。しかも、題材化されていたとしても、その言語そのものを取り上げて構造や音声、あるいは歴史的、社会的背景を説明するというものではなく、その言語について何らかの部分言及がなされる、といったレベルのものがほとんどである。以下、教科書ごとに具体例を示す。

### (1) 教科書A

1 年生用教科書の表紙の裏側に“Languages around the World”の見出

しで、日本語の「ありがとう」に相当する表現が、英語、フランス語、アラビア語、スワヒリ語、ヒンディー語、カンボジア語、ポルトガル語、ハワイ語、ロシア語、中国語、モンゴル語で示されている。

その他、スペイン語については1年生用教科書で、マラーティー語<sup>(2)</sup>、ヒンディー語について2年生用教科書で言及されている。フランス語については、“Bonjour.”というあいさつが3年生用教科書本文に登場している。

まず、スペイン語の例について示す。

Paul: This is Mike. He's my cousin.

Kumi: Is he studying English?

Paul: No, he isn't.

Kumi: What is he studying?

Paul: He's studying Spanish. Many people speak it in the USA.

Paul はアメリカ合衆国出身で、日本の学校に通っている中学生、久美は日本人の中学生である。せっかくスペイン語を取り上げるのであれば、なぜスペイン語を話す人々がアメリカに多くいるのか、といった問題まで掘り下げる必要があるだろう。かつては移民の国アメリカで「少数民族 (minority)」とされていたヒスパニック (Hispanic) 系の人々が、いまやアメリカ大統領選を左右するほどの強い政治的、社会的影響力を持つようになった歴史的経緯等についても触れることが求められるのではないか。ただ単にアメリカ合衆国ではスペイン語を話す人が多い、という事実のみ述べるのでは不十分であろう。

次に、マラーティー語、ヒンディー語の例について示す。登場人物自らが、自身の使用する母語を含む複数の言語について触れている教材は、今回調査した全6種類の教科書中、この一例しかない。

最初のパートでは、インド出身で日本の中学校に在籍しているラージが、標識をもとに次のような説明を行っている。(写真については省略)

Look at this photo. This is a sign in India. Four languages are used on it. In addition to those, at least 30 other languages are spoken in India. I speak three of them.

多言語国家インドについて三十数種類以上の言語が使用されており、

ラージ自身も複数の言語を使っていることを述べている。

次のパートでは、ラージと久美がインド映画について話をするが、文化的な題材なのでここでは省略する。

三番目のパートでは、ラージのスピーチが新聞記事の形でそのまま載せられている。

### India, My Country

*Namaste.* It is one way to say hello or goodbye in India. India is located in South Asia. More than one billion people live in India. They speak many languages. I speak three of them: Marathi, Hindi and English.

Marathi is my first language. It is used in western India. I usually speak it with my family at home. Many stories are written in Marathi. I enjoy reading them.

I also speak Hindi. Do you know any Hindi words? Of course you do. 'Bandanna' and 'shampoo' are from Hindi. Hindi is the major language of India. I speak it at school.

I speak English too. Long ago, English was not spoken in India. Then the British came. India was ruled by them from the 1600s to the mid-1900s. Many people needed to learn English. Later the British left, but their language remained. Now English used across the country. In my case, I use it to talk with friends from other places.

I learned a lot from each of my languages: Marathi, Hindi and English. Now I am learning Japanese. All of them are special to me. *Arigato.*

ラージ自身がマラーティー語、ヒンディー語、英語の三つの言語を使用する「複言語話者」でもあり、状況に応じてそれらを使い分けていることも述べられている。また、それぞれの言語について、地域的、社会的な背景についても簡単な説明がなされている。「バンダナ」や「シャンプー」など、だれもが知っている単語がヒンディー語に由来することなどは、中学生の興味を引くだろう。

英語については、もともとはインドの言語ではなく、イギリスの植民地支配により使われるようになったこと、またそのイギリスが去った後も、英語そのものは残って国内の共通語としての役割を果たすようになっていることが述べられている。全体的に多言語国家インドの現在の状況とその



歴史について、簡潔かつ的確に述べられている。

このような言語学習歴、使用歴を踏まえて、さらに日本に留学して日本語も学んでいるラージの姿勢は、日常的にほとんど日本語にしか触れる機会のない大部分の日本人の中学生にとって、異言語学習に対する意識の変革と強い動機づけをもたらすものと考えられる。

## (2) 教科書B

「世界の国からこんにちは」の見出しで、日本語の「こんにちは」にあたるあいさつが、ロシア語、フランス語、ドイツ語、中国語、アラビア語、スワヒリ語、英語、韓国語・朝鮮語（教科書の表記のまま）、スペイン語、ポルトガル語で示されている。また、各言語のあいさつの背景には世界地図が印刷されていて、主として英語を母語している地域、主として英語を共通語としている地域、その他の地域、の三地域に色分け区分されている。

1年生用教科書では、読み物用教材として、課全体で点字（Brail）について取り上げている。今回分析をした6種類の教科書の中で、点字を取り上げたのはこの教科書のみであった。点字の基本的なシステム（アルファベット）について説明をした上で、さらに数字、音符、日本語の点字についても簡潔に説明している。点字や手話も、当然、言語の中に含まれるべきものであり、それを限られた頁数の中で教材化していることは評価できよう。

3年生用教科書では、日本語と英語の表現の違いについて取り上げている。以下、本文を示す。

“Sumimasen” is a word you use every day. At first, I thought it was the Japanese expression for “I’m sorry.” But the word is used in other situations as well.

The other day, a woman I helped said “sumimasen” to me. In English, we usually say “thank you” in that situation.

“Sumimasen” is also used when you want to get someone’s attention. “Excuse me” is the phrase we use in this case.

It is useful to know such differences between languages. By learning a foreign language, we can also learn new things about our own language.

異言語を学ぶことによって、自身の母語についても新たな「気づき」を

得ることができる、ということ述べている。ここには、ゲーテの「異言語を知らぬものは母語を知らない (Wer fremde Sprachen nicht kennt, wei ß nichts von seiner eigenen.)」にも通じる、単なる「言語道具論」を超えた異言語学習に対する複眼的な視点が感じられる。

ただ、上記が、インド出身で日本の中学校に在籍しているシーマ・グプタ (Seema Gupta) の体験として語られている点は一考を要しよう。上記の内容の語り手は、必ずしもインド出身者でなければならないというものではない。せっかくシーマを登場させるのであれば、先に見た教科書 A の例のように、多言語・多民族・多文化国家であるインドの社会的状況を背景にした、日本とは異なる複数言語の使用の実態等について考えさせる内容にすることもできたのではないだろうか。

### (3) 教科書C<sup>(3)</sup>

フィンランド語、スウェーデン語について、2年生用教科書で言及されている。また日本語と英語の表現の違いについても、同じ2年生用教科書で言及されている。日本語と英語の違いについては、先に取り上げた教科書 B の例と同様なので、ここでは省略する。

以下、フィンランド語とスウェーデン語について言及されている本文を示す。

Yuki :Guess what! I'm going to visit Finland this summer.

Mike :That's great! How come?

Yuki :Our city has a student exchange program with Helsinki.

Mike :I see. How long are you going to stay there?

For one week. I'm going to stay with a Finnish host family in Helsinki.

Mike :Do they speak English?

Yuki :Yes. They speak three languages, Finnish, Swedish, and English.  
So I can talk with them in English.

Mike :What are you going to do in Helsinki?

Yuki :I'm going to meet and talk with some Finnish students.

Mike :Oh, are you? Are you going to do anything else?

Yuki :Well, I'm not sure. Perhaps I will do some shopping for my family.

Mike :Good idea! Finland is famous for good designs.

Yuki :And perhaps I'll go to some museums too.

由紀 (Yuki) は日本人の中学生の女の子で、1年前にはイギリスにホームステイしている。今年の夏はフィンランドに行く予定であるが、そのことについて、アメリカ出身で日本の中学校に在籍しているマイク (Mike) と話をするという場面である。

フィンランドについて言語状況について、由紀が “They speak three languages, Finnish, Swedish, and English.” と述べているのに、その背景については全く触れられていない。せっかくフィンランドについて取り上げるのであれば、約六百年におよぶスウェーデンによる統治の時代があり、まずスウェーデン語が公用語として認められ、その後 1862 年に、当時のロシア皇帝アレクサンダー 2 世により、フィンランド語もあわせて公用語となったこと、先住民族サーミ人の言語も 1991 年に公用語に準ずる地位を獲得していること、また、現在の憲法では、スウェーデン語、フィンランド語、サーミ語に加えてロマニ語<sup>(4)</sup> と手話についても言及がなされており、それぞれの言語の使用者の権利が法的にも保障されていること等についても、(日本語の補足的な解説でもよいので) 取り上げる必要があるのではないか。英語で OK、デザインが優れているといった程度の内容では、フィンランドについて取り上げる意味があまり感じられない。

公用語の背景には、それぞれの言語を使用する民族の「言語権」の法的な保障の問題があることや、日本のアイヌ語や琉球語の話者が、その言語権を当時の日本政府により弾圧されたことなど、生徒たちに、真にことばの問題を考えさせる内容に深化させていく必要がある。

#### (4) 教科書D

1年生用教科書の表紙の裏側に「【テーマ】 出会う」の見出しで、日本語の「こんにちは」と「ありがとう」に相当する表現が、韓国・朝鮮語 (教科書の表記のまま)、フランス語、スペイン語、ドイツ語、中国語、英語、ロシア語、ヒンディー語、アラビア語、ポルトガル語で示されている。

1年生用教科書本文で、ポルトガル語と中国語 (漢字) について、それぞれ別の課で言及されている。

まず、ポルトガル語の例を示す。

Kota :What language do people in Brazil speak? English?

Paulo:We speak Portuguese.

Kota :But you speak English well. Does Maria speak English, too?

Paulo:Yes. Her English is very good. She plays soccer in America now.

Kota :Wow. Which do you speak at home, English or Portuguese?

Paulo:Of course, Portuguese.

光太 (Kota) は日本人の中学生、パウロ (Paulo) はブラジル出身で、光太の中学校のサッカー部のコーチという設定である。光太の質問は、英語は世界各地で使用されていて、通用する、という「英語万能論」のようなものが感じられるが、これが一般的な日本人の中学生の異言語観であるかもしれない。そうであればなおのこと、そのような異言語観は、できるだけ早い段階では正されなければならない。

そもそも、ポルトガル語が主要言語とされているポルトガル本国とは離れたブラジルで、なぜポルトガル語が多くの人々の母語として使用されているのか、を考えさせる教材化をしなければ、その意味が半減してしまうだろう。現在、ポルトガル語の話者人口は、ポルトガルが約一千万人、ブラジルが約一億三千万人、アンゴラ、モザンビーク等の旧アフリカ植民地諸国が約二千四百万人とされている。<sup>(5)</sup> 歴史的、社会的な経緯を踏まえることなく、ただ家庭では (英語ではなく) ポルトガル語を使用する、という事実を示すだけでは、極めて不十分な内容と言わざるを得ない。

次に、中国語 (漢字)<sup>(6)</sup> の例を示す。

1. 机	<input type="checkbox"/> desk	<input type="checkbox"/> airplane
2. 湯	<input type="checkbox"/> shower	<input type="checkbox"/> soup
3. 汽車	<input type="checkbox"/> bus	<input type="checkbox"/> car
4. 作業	<input type="checkbox"/> practice	<input type="checkbox"/> homework
5. 去英国	<input type="checkbox"/> come from the U.K.	<input type="checkbox"/> go to the U.K.

Mike: Kota, what do these Chinese words mean?

Kota: Oh, they're easy.

Mike: Be careful. They're not so easy. And don't ask anyone.

光太は✓を記入してマイクに返します。その結果は・・・。

Mike: OK. Let's check your answers.

Kota: Oh, no! Two of them are wrong.

Mike: Well, don't worry about it.

マイク (Mike) は、光太の中学校の ALT であるエレン・ペーカー (Ellen

Baker) (アメリカ合衆国のボストン出身) の弟で、日本の中国料理店で働いているという設定である。中国語といっても、かつて日本が借用し、現在も使用している「漢字」という文字を教材化しているのは、中学生にもなじみやすいだろう。ただ、漢字を取り上げるのであれば、単なるクイズのレベルでとどめるのではなく、漢字の歴史や成り立ち、さらに日本語で使用されている漢字(常用漢字)と中国語で使用されている漢字(簡体字)の相違等まで掘り下げることもできたと思われる。

また、中国料理店で働いているとはいえ、英語を母語とするアメリカ人から一方的に中国語(漢字)を教わる、という設定にも問題があるろう。日本人の中学生からすれば、姉のエレンからは学校で英語を教わり、弟のマイクからは中国語(漢字)を教わる、という二重の受動的学習者役を請け負わされることになる。

本教科書では設定されていないのであるが、できれば中国人の中学生の登場人物を設定し、日本人の中学生と、それぞれの母語である中国語と日本語を教え合う、という「双方向的な」場面が、言語相対主義の考え方からしてもより望ましいと言える。

### (5) 教科書E

3年生用教科書の“Athletes and Languages”の課で、卓球の福原愛選手がどのようにして中国語を習得したかについて言及されている。(他の選手は、全員、英語の習得についての話となっている。)以下、本文を示す。

Lots of Japanese athletes compete in foreign countries. Many try to learn the languages of those countries. For example, Fukuhara Ai is an athlete who compete abroad. She played in China's table tennis league and now she speaks Chinese fluently.

How did she learn Chinese? She didn't learn it from books, but by ear. The language which her trainers used was Chinese. Gradually, she began talking with them in Chinese. Many Chinese people cheer for her even in matches between China and Japan. Her communication skills have increased her popularity.

中国語について取り上げた教科書は、この教科書ともう一冊(教科書Dの漢字)だけである。福原選手以外の選手が、全員、英語の習得についての話となっている中で、中国語を取り上げたこと自体は評価できるが、最

後の結論が、「言語道具論」の域を出ていないのは問題であろう。

さらに、福原選手は、本からではなく、耳から中国語を学んだ、とあるが、これは卓球の本場ともいえる中国で、中国人コーチから直接指導を受けることができるという、福原選手の（本人の努力はあるにせよ）非常に恵まれた環境の中での話であり、一般的な日本人の中学生の異言語学習の実態とは大きく異なるものである。このような特殊な例を、日本人の異言語習得の成功例として提示することは、適切とはいえないのではないか。

## （6）教科書F

1年生用読み物教材の箇所、日本語と英語の表現の違いについて言及されている。以下、本文を示す。

Hello, everyone. I'm Tina.

I came to Japan last year. I take Japanese lessons on weekends. I study Japanese very hard. But it's difficult for me.

For example, in Japanese, you count pencils this way — *ippon, nihon, sambon*.... But you count minutes this way — *ippun, nifun, sampun*.... *Pon-hon-bon* and *pun-fun-pun*. That's confusing to me.

And this is another example. I learned a Japanese phrase "*kekko desu*." It has different meanings — "That's wonderful," "That's all right," or "No, thank you." That's very strange. How can I use it?

And this is also an example. You use many different words about clothes — *kiteiru, haiteiru, kabutteiru, tsuketeiru*.... In English, we use "wear" for all our clothes — wear a shirt, a skirt, a cap, a scarf, gloves, and so on. That's very easy, isn't it?

Japanese is very different from English. It's very difficult for me. But sometimes it's interesting and fun. So I enjoy my Japanese lessons. How about your English lessons?

ティナ (Tina) というアメリカ合衆国出身で日本の中学校に通っている女子生徒が自身の日本語学習について述べたものである。このティナの異言語観には、極めて深刻な問題点が隠されていると指摘できる。

ティナは日本語における物の数え方の違いを指摘し、"That's confusing to me." と述べているが、英語には、発音とつづり字の関係の不規則性が厳然として存在している。また、可算名詞と不可算名詞、単数と複数など、

日本語にはない区別もしなければならない。英語を異言語として非母語話者が学ぶ際には、このような困難点があることを全く意識せず、ただ自身のせまい日本語学習の経験のみから、日本語学習の難しさを断定することは、きわめて一方的で言語帝国主義的な態度である。どの言語にも（ティナの言葉を借りれば）“confusing”な面があり、その在り様が言語によって異なっている、ということこそ認識しなければならない言語事実であろう。いや、むしろこの「違い」こそが、それぞれの言語の「個別性」を際立たせ、世界の諸言語の「多様性」を作り出しているとも言える。言語の多様性はそれを否定するのではなく、それを認め合い、尊重し合う意識・態度の育成が必須である。

日本語の「結構です。」についても、その多義性をあげて “That’s very strange.” と述べているが、日本人はこの表現を、場面や状況に応じて適切に使い分けている。この使い分けが（日本語の非母語話者には）むしろかしい、ということであれば、“That’s wonderful.”（すばらしいです。）“That’s all right.”（問題ありません。）“No, thank you.”（いいえ、結構です。）と、最後の表現のみに「結構です。」の使用を限定することもできる。このようにすることにより、意味の誤解が生じるのを防ぐとともに、より学びやすい異言語学習の過程を示すことが出来るのである。

ティナはまた別の例として、何かを身に着ける際の動詞として、日本語では「着ている」「はいている」等の異なった表現を用いなければならないのに対し、英語では“wear”一語で済むので “That’s very easy, isn’t it?” と述べているが、これも極めて独善的で危険な断定である。例えば、「焼く」という日本語の動詞に対して、英語では、“bake”（魚・野菜・パン・ケーキの場合）、“roast”（肉）、“broil”（網に載せて直火で）、“barbecue”（材料にたれをつけ、直火で焼きながら食べる場合）、“toast”（スライスしたパンの場合）、“fry”（卵の目玉焼きの場合）があり、何を焼くかにより、どのような動詞を用いるかについて細かな意味区分がなされている。これは、英語圏では肉食が中心、という食習慣の違いから生じたと考えられるが、このような例は「なく（生き物が発声をする）」— “cry, weep, sob, wail, bark, howl, roar, yap, whine, baa” や「うつ（何かに力強くあてる）」— “beat, strike, hit, knock, slap, drive” 等、枚挙にいとまがない。そもそも、自然言語について、ある部分が学習しやすく（日本語の母音等）、ある部分が学習しにくい（日本語の文字体系等）とは言える場合があるかもしれないが、ある言語がある言語よりも “easy” とか “difficult” とかを判断すること自体が不可能である。



結局、この教材が主張しているのは、英語は日本語より学びやすい言語だからしっかり勉強しましょう、ということなのであろうか。異言語学習により言語の相対性を学ぶ、といった視点は全く抜け落ちてしまっているとわざるを得ない。

### 3. まとめー設定された登場人物と英語以外の言語の関係

検定済教科書で言及された英語以外の言語をまとめると「表2」のようになる。(表表紙の裏側のあいさつ等は除く。)

表2：検定済教科書において言及されている英語以外の言語

教科書	言及されている言語
教科書 A	スペイン語、マラーティー語、ヒンディー語、フランス語
教科書 B	点字、日本語
教科書 C	フィンランド語、スウェーデン語、日本語
教科書 D	ポルトガル語、中国語（漢字）、日本語
教科書 E	中国語
教科書 F	日本語

次に、英語および日本語の母語話者以外の登場人物の出身地域を「表3」に示す。

表3：英語および日本語の母語話者以外の登場人物の出身地域

教科書	出身地域
教科書 A	インド、中国、フランス
教科書 B	インド、ドイツ
教科書 C	インド
教科書 D	インド、ブラジル
教科書 E	シンガポール
教科書 F	韓国

前節において教科書の具体的な例を分析したが、上記の二つの表からもわかるように、設定された登場人物の（複数の）母語と、題材として取り上げられている言語には、必然的な関係はあまりないことがわかった。登場人物とその母語の結びつきが実際に教材化されているのは、教科書 A の「マラーティー語、ヒンディー語ーインド」と教科書 D の「ポルトガル語ーブラジル」のみである。教科書 B ではインドおよびドイツ出身の



登場人物が設定されているが、それぞれが使用している母語についての言及はない。教科書 C および教科書 D にもインド出身の登場人物が設定されているが、同様に使用している言語についての言及はない。教科書 E にはシンガポール出身の登場人物が設定されているが、取り上げられている題材は、彼女とは別の、卓球の福原愛選手の中国語学習についてである。教科書 F では韓国出身の登場人物が設定されているが、朝鮮語についての言及は全くない。

これらの登場人物は、例えば文化的な題材の観点からは、教科書 B でドイツからの転校生がドイツのリサイクル運動についてスピーチをする、という一定の関連性を持たせている。しかしそれも一課分のみで登場で、彼女の母語であるドイツ語についての説明は全くない。検定済教科書が、言語的題材よりも文化的題材を圧倒的に優先していることは明らかである。文化的多様性と言語的多様性は、どちらも等しく重要なものであり、よりバランスのとれた題材化と教科書での取り扱いが求められるところである。

## おわりに

本稿では、検定済英語教科書 6 種類について、設定された登場人物を中心に、英語以外の言語（日本語を含む）そのものがどのように取り扱われているかを、教科書の具体例をもとに題材論の観点から分析と考察を行った。

結論としては、登場人物として非英語圏の地域出身者が設定されていても、その人物が使用する言語について教材化されている例は、きわめて少ないことがわかった。また、取り上げられている場合でも、単なる表面的な紹介や言語道具論的な扱いがほとんどで、津田（2003）の言葉を借りれば、「言語が文化、政治、権力、歴史、アイデンティティと切り離せないという言語への存在論的視点が欠落している。」(p. 34) ということになる。

唯一の例外は、インド出身の登場人物自らが、自身の使用する（複数の）母語についてスピーチをしている教材（教科書 A）である。また、点字を取り上げた教科書 B も評価できよう。<sup>(7)</sup> この二例は、検定制度も含めて、さまざまな制限の中で作成されなければならない教科書がめざすべき一つの方向性を示しているように思われる。

人間としての成長過程にある中学生に対して、言語が持つ「政治性」、「権力性」、「支配性」、「侵略性」といった本質的な「社会的特性」を意識させることなく、単なる道具論的な観点のみから教授していくことには、大き

な危険性が伴う。なぜならば、英語のような強大言語の場合、その学習者に、知らず知らずのうちに英語優先主義を植え付け、学習者自身の母語や英語以外の言語を軽視する「精神の自己植民地化」<sup>(8)</sup>を引き起こす恐れがあるからである。

改訂版中学校英語教科書については、CAN-DO リストの提示や取り扱われている語彙数が倍増したことが話題を呼んでいるが<sup>(9)</sup>、扱われている内容（題材）そのものについても、より多くの関心と注意が払われるべきであろう。

言語は、コミュニケーションの有効な道具であるのと同時に、私たちの思考を支え、知性を深めるといふ大切な役割を担っている。国際語としての英語の持つ「危険性」を十分に意識しながら、それぞれの母語や文化を認め尊重し合い、対等で公平な相互コミュニケーションの環境を協力して作り上げていくためにも、検定済教科書の題材のさらなる精査と改善が求められる。

#### 註

- (1) 本稿で分析の対象とした中学校外国語科（英語）用文部科学省検定済教科書は以下の6種類18冊である。いずれも2016（平成28）年度版。順不同。  
*New Crown English Series 1～3* 三省堂  
*New Horizon English Course 1～3* 東京書籍  
*One World English Course 1～3* 教育出版  
*Sunshine English Course 1～3* 開隆堂  
*Total English 1～3* 学校図書  
*Columbus 21 1～3* 光村図書
- (2) インドのボンベイを州都とする西部マハーラーシュトラ州の公用語。隣接する州も含めて約五千万人の言語人口を有するとされる。（柴田（1993, p. 438）による。）
- (3) この教科書Cの分析と考察については、川又（2013, pp. 167-168）をもとに、修正を施したものである。また、フィンランドの言語の状況や歴史については、柴田（1993, pp. 366-368）、亀井他（1992a, pp.672-673）、フィンランド大使館ホームページ（<http://www.finland.or.jp/public/default.aspx?nodeid=46041&contentlan=23&culture=ja-JP>）（2017年12月14日現在）等による。
- (4) ジプシーの母語。ジプシー語（Gypsy）ともいう。10世紀前後に故郷であるインド北西部から西に向かって放浪し、15世紀のはじめ頃からヨーロッパに急速に侵入したとされる。（亀井他（1992b, pp.1068-1069）による。）
- (5) 柴田（1993, p. 426）による。
- (6) 例として挙げられている中国語（漢字）の表記については、教科書のままである。
- (7) 例えば2012（平成24）年度版*New Horizon English Course 3*（東京書籍）のUnit 1では点字や手話が取り上げられていたが、2016（平成28）年度版では姿を消している。このような教材については、改訂の度に見直しをするのではなく、「定番化」していくことが求められるのではないか。

- (8) 津田 (2003, p.165) は、「言葉を使うに当たって、英語という言語に傾倒・同一化し、母語・自文化を軽視する意識・態度・行動等」と定義している。
- (9) 大修館『英語教育』2016年2月号参照。(「[第1特集]【使用開始直前】中学校改訂版教科書もっと楽しく活用したい」)

#### 引用・参考文献

- 亀井孝他 (編) 1992a. 『言語学大辞典 第3巻 世界言語編』 三省堂
- 亀井孝他 (編) 1992b. 『言語学大辞典 第4巻 世界言語編』 三省堂
- 川又正之 1998. 「多言語・多文化主義をめざして」 関東甲信越英語教育学会『ニュースレター』 pp. 3-4. 関東甲信越英語教育学会
- 川又正之 1999. 「『民族語』から『族際補助語』としての英語へー新しい英語の役割と日本の英語教育」 カリタス女子短期大学紀要『CARITAS』第33号、pp.70-80. カリタス女子短期大学
- 川又正之 2000. 「言語とイデオロギー：英語帝国主義を考える」 関東甲信越英語教育学会『ニュースレター』 pp. 5-6. 関東甲信越英語教育学会
- 川又正之 2002. 「検定済教科書に見られる『英語帝国主義』のイデオロギー」『人文学部研究紀要』第15号、pp. 23-31. いわき明星大学
- 川又正之 2003. 「英語とはどんな言語なのかーその『光』と『陰』を考える」『いわき民報』7月18日 心の時代と科学欄
- 川又正之 2005. 「中学校英語教科書と英語帝国主義のイデオロギー」『外国語教育論集』第27号、pp. 39-47. 筑波大学外国語センター
- 川又正之 2006. 「高等学校『オーラル・コミュニケーションⅠ』の教科書と英語帝国主義のイデオロギー」『外国語教育論集』第28号、pp. 107-120. 筑波大学外国語センター
- 川又正之 2008. 「日本の英語教育における英語帝国主義のイデオロギー (1) - 『学習指導要領』」『外国語教育論集』第30号、pp. 61-73. 筑波大学外国語センター
- 川又正之 2009. 「日本の英語教育における英語帝国主義のイデオロギー (2) - 『国際語としての英語教育』」『外国語教育論集』第31号、pp. 101-112. 筑波大学外国語センター
- 川又正之 2013. 「中学校英語教科書の比較と分析ー『英語帝国主義論』の観点から」『敬和学園大学研究紀要』第22号、pp. 157-172. 敬和学園大学人文学部
- 川又正之 2015. 「音声指導と英語帝国主義のイデオロギー (1)」『敬和学園大学研究紀要』第24号、pp. 73-86. 敬和学園大学人文学部
- 川又正之 2016. 「音声指導と英語帝国主義のイデオロギー (2)」『敬和学園大学研究紀要』第25号、pp. 17-31. 敬和学園大学人文学部
- 柴田武 (編) 1993. 『世界のことば小事典』 大修館書店
- 田中克彦 1993. 『国家語をこえて』 ちくま学芸文庫
- 津田幸男 1990. 『英語支配の構造』 第三書館

- 津田幸男（編著）1993.『英語支配への異論』 第三書館  
 津田幸男 2003.『英語支配とは何か－私の国際言語政策論』 明石書店  
 津田幸男 2005.『言語・情報・文化の英語支配』 明石書店  
 津田幸男 2006.『英語支配とことばの平等』 慶應義塾大学出版会  
 中村敬 1989.『英語はどんな言語か』 三省堂  
 中村敬 1993.『外国語教育とイデオロギー』 近代文藝社  
 中村敬 2004.『なぜ、「英語」が問題なのか－英語の政治・社会論』 三元社  
 文部科学省 2008.『中学校学習指導要領解説 外国語編』開隆堂出版  
 文部科学省 2010.『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』 開隆堂出版

- Phillipson, R. 1992. *Linguistic Imperialism*. Oxford: Oxford University Press.  
 Smith, L.F. 1983. "English as an International Auxiliary Language." In Smith L.F. (ed.) ,  
*Readings in English as an International Language*, pp.1-5. Oxford: Pergamon Press.  
 Smith, L.F. (ed.) 1983. *Readings in English as an International Language*. Oxford: Pergamon  
 Press.  
 Trudgill, P. and J. Hannah. 1994. *International English (Third Edition)* . London: Edward  
 Arnold.